

[学年・学校経営等]

学校教育ビジョン具現に向けた、地域教育コーディネーターの効果的な活用

石川 裕*

1 はじめに

当校は、各学年1学級の小規模校である。子どもたちは入学後クラス替えがなく、実態として、「自分の考えを自信をもって発表することができる」ことに関しての、自己評価が低くなっていた（平成22年度児童アンケートでは、4段階評価のA評価（最もよい評価）が40%）。自信をもって発表することに苦手意識をもっている子どもたちに、様々な活動を通して自信をつけていくことが課題としてあげられた。この課題を解決するために、平成23年度の当校の教育ビジョンに、目指す子どもの姿のひとつとして、「自信をもって発表できる子どもを70%以上（4段階評価のA評価）にする」ことをあげ、教育ビジョンの具現に向けた教育活動を推進することとした。教育活動推進にあたっては、新潟市が地域を誇れる子どもをめざしていること、外部の力を活かすことを学校教育の方向として示していることを考慮することにした。

新潟市教育委員会は、「新潟市教育ビジョン基本構想・基本計画」を策定し、新潟市の教育の方向とあり方を明確にしてきた。平成26年度までに実施する後期実施計画の学校教育の目指す方向では、「自分の力に自信をもち、地域を誇れる子ども」、「学校間連携と外部の力を活かした学校づくり」などをあげ、平成26年度までに全小・中学校に地域教育コーディネーター（以下コーディネーター）を配置し（地域と学校パートナーシップ事業）、学校・地域・社会教育施設等を融合した教育を推進している。コーディネーターは、学校と地域が共に元気が出るように、学校と社会教育施設や地域活動を結ぶネットワークを形成し、学・社・民の融合を推進していく役割を担っている。

これまでにコーディネーターが配置された学校の成果として、「学習活動が充実した」、「教職員の負担軽減の一助となった」などがあげられている。しかし、学校の教育課題解決に向けて具体的にどのように学習活動が充実したのか不明な点もある。当校でも、平成21年度にコーディネーターが配置され、様々な学習活動を展開してきたが、教育ビジョンの目指す子どもの姿にどうつながっているのか不明確であった。

そこで、当校が、教育ビジョンの具現に向けて、教職員の負担を軽減しながらも外部の力を活かし、子どもに自信をつける教育活動を展開していくには、どのようにコーディネーターを活用するとよいのか、具体的な事例を集め、考察することが必要であると考えた。

2 研究の目的

子どもに自信をもって行動できる力を育成する教育ビジョンを具現するために、外部の力を活かすことが大切である。その際、コーディネーターをどのように活用すると効果的なのか、具体的な事例から有効な活用方法を提示することを目的とする。

3 研究の内容とその方法

これまでの活動を分類・整理・類型化し、コーディネーターの活用の効果について考察する。

(1) 抽出する活動

平成23年度の各学年の活動から、特に「子どもに自信をつけること」にかかわりがあると考えられる活動を抽出する。子どもに自信をつけることにかかわりがある活動は、子どもが対象に直接はたらきかけることができること、外部人材と直接かかわることができることとした。

* 新潟市立小瀬小学校

(2) 各活動から取り出す内容

抽出した活動ごとに、主な活動の流れ、コーディネーターの業務、教員の負担軽減に役立った業務、子どもの姿、外部人材の活用について表に整理する。コーディネーターの業務について、A事前交渉、B活動依頼、C案内状作成・参加者集約、D当日対応、E事後の礼状作成・発送、F物品等準備・後始末、G報告、H提案に分類する。そして、子どもの姿、担任の負担軽減、活動の充実などの面からコーディネーター活用による効果を考察する。

4 結果

(1) 1, 2年生の活動

① ねらい

1, 2年生は、生活科でサツマイモ作りに取り組んだ。植え付けから収穫、収穫したサツマイモの調理までの年間を通した活動である。植え付けや収穫時など、畑の先生（外部人材）から直接指導を受けたり、質問したりする活動を通して、自信をつけていく。また、お礼状などを作成し、自分の思いを伝える活動を繰り返し、表現する力を付けていく。

② 活用方法

活動の実際は表1の通りである。

表1 1, 2年生の活動の実際

月	主な活動	コーディネーターの業務	教員の負担軽減に役立った業務	子どもの姿	外部人材
4		・地域の方に学校畑の掘り起こし依頼。(B)	・畑の耕作、植え付け用の畝作り。		・畑の作業。
5	・サツマイモの苗植え	・サツマイモの植え付けボランティア募集で、老人会等への事前の打診。(A) ・ボランティア募集の案内作成。参加者集約。(C) ・植え付け当日の参加者対応。(D) ・活動後のお礼状作成、発送。(E)	・ボランティア募集の案内作成、集約。 ・植え付け当日のボランティア対応。 ・お礼状発送。	・畑の先生から、サツマイモの植え方について指導を受ける。その後、わからないことを聞いたり、確認したりしながら植え付けを行った。	・地域の方、保護者合わせて8名。
9		・畑の手入れとして、草取りの依頼、実施。(B) ・草の処理。(F)	・畑の管理、草取り、草の後始末。		・地域の方5名。
10	・イモほり	・イモほりボランティア募集。参加者集約。(C) ・当日参加者対応。(D) ・活動のお礼状作成、発送。(E)	・ボランティア募集の案内作成、集約。 ・当日のボランティア対応。 ・蔓の残りの後始末。 ・お礼状発送。	・大きなイモを収穫し、ボランティアから声をかけてもらう。また、蔓で、リースを作るために、一定量をまとめる作業を行った。	・保護者、地域の方合わせて7名。
12	・サツマイモ調理	・調理ボランティア募集。(C) J A (農協) への協力依頼。(B) ・お礼状作成、発送。(E)	・ボランティア募集の案内作成、集約。 ・お礼状発送。	・収穫したイモを使い、ボランティアの方から指導を受けながら調理を行った。	・保護者を中心に6名。

③ 効果

子どもたちは、畑の先生である地域の方や友達の祖父母、保護者とのかかわりを通して(図1)、特別のことを教わったように感じ、自信をつけていった。活動ごとのお礼状には、楽しく活動できたことや感謝の気持ちを表現していた。活動を繰り返すうちに、子どもとボランティアが「こんにちは」という挨拶を自然にかわすようになった。

担任は、コーディネーターが、外部との交渉、参加者対応、事後の後始末等の業務を行うことで子どもの指導に集中できる時間が確保された。子どもがボランティアとどのようにかかわり、体験した結果をどのように表現するかを丁寧に見取ることができた。

(2) 3年生の活動

① ねらい

3年生は、学校の畑で大豆を作り、収穫した大豆から納豆作りを行う総合の学習に取り組んだ。自分の生活と地域の人、自然とのかかわりを探りながら、地域のよさにふれ、地域を誇りに思えるようにすることをねらっている。



図1 イモの植え付け

大豆を使った食品は身の回りにたくさんあり、姿を変えて様々に利用されている。しかし、実際にどのように作られるのかわからない。専門家（外部人材）から教えてもらいながら作ることで自分の世界を広げ、自信につなげる。

② 活用方法

活動の実際は表2の通りである。

表2 3年生の活動の実際

月	主な活動	コーディネーターの業務	教員の負担軽減に役立った業務	子どもの姿	外部人材
4		・地域の方に学校畑の掘り起こし依頼。(B) ・種まき用大豆をJAに手配。(F)	・畑を耕し、植え付け用の畝作り。 ・大豆準備の交渉。大豆の手配。		・地域の方。 ・JA職員。
5	・大豆の種まき	・大豆種まきボランティア募集案内作成。集約。(C) ・当日のボランティア対応。(D) ・お礼状準備、発送。(E)	・ボランティア募集の案内作成、集約。 ・当日のボランティア対応。 ・お礼状発送。	・グループごとに畑の先生が付き、植え方を指導してもらったり、質問をしたりした。	・地域の方5名。
7	・野菜作りの工夫や努力	・野菜作り名人依頼。(B) ・お礼状発送。(E)	・野菜作り名人選定、授業への参加依頼。 ・当日対応、お礼状発送。	・大豆が大きくなる時に注意しなければならないことを知った。	・地域の方1名。
10	・大豆の収穫	・収穫ボランティア依頼。(B) ・当日の対応。(D) ・お礼状作成。発送。(E)	・収穫ボランティア探し、依頼。 ・大豆収穫準備。 ・当日の対応、お礼状発送。	・畑の先生から、収穫の仕方と収穫後の保存方法について聞き、実際に行った。	・地域の方2名。
12	・納豆づくり	・納豆づくり業者との交渉。(A) ・業者決定後の正式依頼、打合せ。(B) ・お礼状作成、発送。(E)	・業者選定、交渉。依頼状作成、発送。 ・当日の対応。お礼状作成、発送。	・専門家から納豆作りの方法を聞き、実際に作った。	・納豆業者1名。

③ 効果

子どもたちは、枝豆は知っているが、地域でたくさん収穫される大豆については知らないことが多い。栽培、収穫、保存、そして、様々な食品への利用について学習を深めていくとき、活動の節目ごとに外部人材を活用した。低学年で野菜作りの経験はあるが、保存や食品への加工は初体験である。専門家から直接指導を受け（図2）、実際に作り、自分や家族で食べる。このことが、自分の世界を広げることにつながり自信をつけていくことになった。



図2 納豆作り

この活動は、収穫時はボランティアを広く募集する必要がなく少人数でよかったり、納豆作りでは専門的な知識や技能のある専門家が必要であったりする。そのため、予備交渉に時間がかかる。コーディネーターが交渉役を行うことで、担任の負担軽減となった。また、収穫した大豆をもぎ、殻から外す作業の準備等の負担軽減も大きい。担任は、子どもの活動が探求的なものとなるよう、指導過程を組み立てることに集中することができた。

(3) 4年生の活動

① ねらい

4年生は、学校の前を流れる西川を取り上げ、地域の自然環境問題を考える総合に取り組んだ。西川の歴史を調べたり、上流から下流までの見学、調べ学習を通したりして、自分たちにできることを発信していく活動である。この学習には、西区役所区民生活課や土地改良区などの公共機関も加わる。また、西川近隣の学校による西川サミットに参加し、学習した成果を発表する活動を行うことで自信をつけていく。

② 活用方法

活動の実際は表3の通りである。

表3 4年生の活動の実際

月	主な活動	コーディネーターの業務	教員の負担軽減に役立った業務	子どもの姿	外部人材
5	・西川の水質検査を行う。	・新潟市環境対策課担当者との日程調整。(A)	・新潟市環境対策課担当者との事前打ち合わせ及び、水質検査の日程調整。	・西川の水質検査を行い、汚れている実態を知り、問題意識をもった。	・環境対策課2名。

6	・地域に伝わるおさき地蔵の話を聞く。	・おさき地蔵を語る方との日程調整。(A) ・案内状作成。(C) ・当日の対応。(D) ・お礼状発送。(E)	・おさき地蔵を語る方との日程調整、授業への参加依頼。 ・お礼状発送。	・地域の方から、西川の氾濫とおさきさんの話を聞き、地域のくらしとの関係を知った。	・地域の方1名。
10	・西川を上流から下流まで調査する。	・西役所区民生活課、土地改良区担当者との事前交渉及び事前打ち合わせ日時設定。(A) ・校外学習日程調整。(A) ・宝光院との交渉、見学依頼。(A)(B)	・打ち合わせ日程調整。 ・見学先、校外学習日程調整。	・西川の各ポイントごとに決めておいた内容の調査を行う。各ポイントでは、区民生活課や土地改良区担当者から説明を聞いたり、質問をしたりした。	・区民生活課、土地改良区各2名。 ・宝光院の方1名。
12	・西川をきれいにする会から思いを聞く。	・西川をきれいにする会との連絡調整、依頼。(A)(B) ・当日の対応。(D) ・お礼状作成、発送。(E)	・学習課題に沿った内容の事前連絡。日程調整。 ・当日、事後対応。 ・お礼状作成、発送。	・地域に生活する方の思いに触れ、これまでの学習のまとめと発信内容の吟味を行った。	・西川をきれいにする会1名。
12	・西川サミットで発表。	・西区区民生活課担当者とのサミット日時、バス配車調整。(A)	・サミット関係の打ち合わせ。	・調べてわかったことを基に、自分たちに何ができるかを発表した。	・西区役所、大学関係者。

③ 効果

子どもたちは、毎日見ている西川に深い思いをもった方がたくさん存在することを知った。調べてわかったこと(図3)をまとめるだけでなく、人々の思いを想像し、他校の子どもたちだけでなく、大人に向かって自分たちにできることを発信することで自信をつけていった。

担任が節目ごとに人とかかわる活動を仕組むことは、事前の交渉、日程調整が難しい。特に、学校を含めた3者間の連絡調整になると、教務室に在中して連絡を取り合う必要が出てくる。コーディネーターが交渉、連絡調整を行ってくれることで、担任は子どもとともに学習のまとめや発表内容の吟味に集中することができた。

(4) 5年生の活動

① ねらい

5年生は、社会の学習と関連させた米について学習を深める総合に取り組んだ。学校田では、毎年田植えと稲刈りを行っているが、収穫までの過程を体験していない。作り手の工夫や収穫の喜びを体験させながら、米作りがさかんな小瀬地区に生きる子どもたちに、地域への愛着を深めることを目指して取り組んだ。地域が好きになり、誇りに思うことが、自信をもつことの土台となる。

② 活用方法

活動の実際は表4の通りである。

表4 5年生の活動の実際

月	主な活動	コーディネーターの業務	教員の負担軽減に役立った業務	子どもの姿	外部人材
4		・JAに苗を依頼。(F)			
5	・各自がバケツに苗を植える。	・苗植えボランティア選定、依頼。(A)(B) ・日程調整。(A) ・当日対応。(D)	・指導ボランティア依頼。	・植える苗の数や水の深さに意味があることを知り、丁寧に植えた。	・地域の方1名。
6	・苗の生育観察。	・ボランティアとの連絡調整。(A) ・ボランティアが自分の仕事の合間に苗の生育状態を急に見に来られた場合の対応。(D) ・担任への事後連絡。(G)	・指導者来校時の対応。	・水の管理。生育状態観察。 ・稲を育てていくうえでの注意を聞いた。	・地域の方1名。
7	・農家の方への取材 ・JA訪問。	・インタビューに答えてくれる農家依頼。(A)(B) ・JAとの日程調整。(A)	・農家、JAとの連絡調整。	・米作りの工夫や苦労、喜びを取材した。また、JAの施設や取り組んでいる業務を調べた。	・地域の農家。 ・JA職員。



図3 調査見学

9	・収穫、精米。	・ボランティアとの連絡調整。(A) ・はさかけ準備。(F) ・千歯こき借用依頼。(B) 準備。(F) ・収穫後の米の保管依頼。(B)	・昔の道具の借用依頼。 ・収穫後の米保管。	・刈り取り、天日干し、昔の道具での脱穀を行った。	・地域の方1名。
11	・感謝の会	・米の準備。(F) ・参加依頼。(B) ・お礼状作成、発送。(E)	・参加依頼。 ・お礼状作成、発送。	・ボランティアにおにぎりを作り、感謝の会を開いた。	・地域の方1名。

③ 効果

子どもたちは、自分が当事者となって米を育て(図4)、地域の方の工夫や米作りに対する思いに触れ、安全でおいしい米作りについて深めていった。感謝の会等のお礼状から、子どもたちは周囲にある田を大切に守り、おいしい米作りに向け努力している人が多い地域であることを誇りに思っていることがわかった。



図4 バケツ稲

地域の方自身も田畑を耕し管理していて、仕事の合間に学校まで稲の生育具合を見に来ることも多く、担任が毎回対応することは難しい。コーディネーターが突然の訪問に対しても丁寧に対応し、事後に担任に伝えることでボランティアと担任との連携役を果たした。

(5) 6年生の活動

① ねらい

6年生は修学旅行先(東京)で、新潟ピーアール活動で自信をもって発信する力をつけることをねらい総合を展開した。新潟ピーアール活動は、子どもたちが新潟のよさを再発見することになる。小瀬地域の米を配ることも同時に行い、自分たちが住む新潟に愛着と誇りをもたせることを目指した。

② 活用方法

活動の実際は表5の通りである。

表5 6年生の活動の実際

月	主な活動	コーディネーターの業務	教員の負担軽減に役立った業務	子どもの姿	外部人材
5		・JAにそら豆発注。(F)	・そら豆準備。	・小瀬小のよさのまとめ。	
6	・新潟駅前、小瀬小のピーアール活動。	・新潟駅へのピーアール活動にかかわる場所、内容の申請。(A) ・JAを通じたそら豆準備(F) ・新潟駅へのそら豆輸送。(F)	・新潟駅担当者との打ち合わせ、申請書作成、送付。	・新潟駅南口広場で、できるだけ旅行者を選び、声をかけ、小瀬小ピーアールを行った。	・新潟駅利用者。
7	・新潟ピーアール活動準備。			・新潟のよさのまとめ。	
9	・東京での新潟ピーアール活動。	・東京で配布する米の発注。(F) ・米の袋詰め準備。発送。(F)	・米手配。 ・小分けした米の発送。	・東京で新潟ピーアール活動を行った。	・ネスパス利用者。

③ 効果

子どもたちは、ピーアール活動(図5)では、見ず知らずの人に自分から働きかけなければならない。待っていても何もことが進まない。勇気をもって声をかけていったことを通して自信をつけていった。修学旅行に向けた練習として、新潟駅でのピーアール活動を行い、東京での本番を迎えた。どちらの活動も話を聞いてくれたお礼として、そら豆や米を手渡した。地元の産物を誇らしげに手渡す姿があった。



図5 ピーアール活動

これらの品物準備をコーディネーターが行うことで、担任の負担軽減となった。担任は、ピーアール活動の原稿やしおりの作成等、子どもの指導に専念することができた。

5 考察

自信をもって発表できる子どもの育成を目指し、各学年がかかわりを中心とした教育活動を展開した。子どもアンケ

ートの結果は以下のように4段階評価のA評価が増加した。

	平成22年度12月	平成23年度7月	平成23年度12月
「自分の考えを自信をもって発表することができる」ことに関しての、4段階評価のA評価の割合	40.0%	44.4%	49.4%

活動の節目ごとに地域人材等の外部の力を活用したり、発信活動を仕組んだりした成果があったと考えられる。子どもの振り返り作文では、「わからないことを質問して、くわしく分かったからうれしかったです。」や「〇〇さんのおじいちゃんから、いっぱい教わりました。」など活動が充実し、新しいことを知った喜び等が記述されていた。活動を繰り返すごとに、ボランティアの方から励まされたことなども自信をつけることにつながった可能性も考えられる。

また、コーディネーター日誌には、「積極的に質問していた姿が印象的でした。」という記述もあった。子どもたちが外部の人とも進んでかわり、自分の考えを伝えていることがコーディネーターによっても評価されていた。

各学年の活動に対し、コーディネーターが行った業務を整理すると表6のようになった。A事前交渉とB活動依頼が多い。担任からの聞き取りの結果、全学年とも、事前交渉と活動依頼を担ってもらうことが最も有効であるという回答であった。1つの活動ごとに、交渉・日程調整・正式依頼・当日対応・事後のお礼状作成、発送という一連の流れを行ってもらうことも有効である。当校のように学年1学級の場合、学年の業務を分担することができない。コーディネーターが外部人材を探し、活動当日にボランティア等に対応することで、学級担任は、活動のねらい達成に向けた指導に集中できる。外部人材等の連絡調整だけでなく、担任と一緒に活動をつくる、企画者としての役目を担ってもらうことが重要である。そのためには、管理職が、担任とコーディネーターが教育ビジョンに掲げる目指す子どもの姿や、各学年の活動のねらいを共有し、ビジョンや子どもの姿から活動を振り返るよう働きかけることが大切である。また、コーディネーターに人材バンクの整備を依頼すること、他地域との情報交換を活発に行ってもらい情報を入手してもらいことも大切となる。

表6 コーディネーターの業務頻度

業務分類	A事前交渉	B活動依頼	C案内状作成・参加者集約	D当日対応	E事後の礼状作成・発送	F物品準備・後始末	G報告	H提案
頻度	16	14	5	8	10	11	1	0

6 課題

当校では、コーディネーターの業務は学校からの依頼が中心であったが、コーディネーターが学校花壇の整備を提案し、ボランティアを募って作業を行ったことがあった。これは、コーディネーターが学校の現状を見て必要であると思われる活動を発案したものである。教育環境を整え充実させるという学校にとって大変役立つ活動であるとともに、ボランティア（地域人材）と学校を近付ける活動でもあった。この事例から、各学年や全校を対象として、コーディネーターが活動を提案したり、担任と双方向性のあるコミュニケーションをしたりして共同して目指す姿に迫る活動を企画展開することも望まれる。コーディネーターに、外部の力を活かして教育活動をさらに充実させる提案窓口としての役割を担ってもらうことが今後の課題である。また、新潟市は学・社・民の融合を掲げている。これまでに地域の力をたくさん活用してきた。今後は、社会教育施設等の活用や交流がビジョンの具現に活かせるかどうか検討していく。

引用文献、参考文献

- 1) 遠藤由美 新潟市「地域と学校パートナーシップ事業」(2008) 季刊「まちづくり」
- 2) 新潟市教育ビジョン後期実施計画概要版(2010) 新潟市教育委員会